合同研究会—最近の展望

Co-operative In-service Training—A Recent Review

東京慈恵会医科大学附属図書館

裏田 和夫*

はじめに

昭和49年4月に発足した“4大学インサービス・トレーニング”は、その後独協医大、自治医大の図書館が加わり、名称も“合同研究会”と変え実施されてきている。

全国的、あるいは関東という広域においてはなかなか困難である職員研修も、少数館で小回りのきく範囲で開催していくことの意義は大きい。当然のことながら、参加の機会に関東地区の加盟館にも開いている。

このような貴重な研究会は、各参加館で忙中なかなか企画が困難と思うが、今後も是非とも絶えることなく継続させていきたいものである。

既に、高野¹⁾、阿字川²⁾によって2年間分が報告されているので、それ以降、昭和52年度第4回(53年4月)分まで、各図書館の報告をもとに紹介する(研究会後に当番館が当日の記録を報告した場合には、それを引用した)。

研究会要旨

昭和51年度第1回(昭和51年5月25日)(参加:47名)

「図書館業務におけるコンピュータ導入の現状と将来」

講師:細野公男(慶応大学図書館・情報学科)

当番:慶応大学医学情報センター

受入、目録、貸出、雑誌の記録管理、およびSDIサービスについての実施例の紹介。

昭和51年度第2回(昭和51年10月30日)

「図書目録の問題点—自治医大ケーススタディー—」

発表:自治医科大学図書館整理係・鈴木康綱

当番:自治医科大学図書館

* Kazuo URATA: The Jikei University School of Medicine Library

(昭和53年9月14日受理)

(1)自治医大の目録記述法の簡略化について。(2)標目の記述について(外来語、学術用語、ローマ字表記、人名表記、標準化)。

昭和51年度第3回(昭和51年12月4日)(参加:44名)

「国際逐次刊行物データ・システムとISSNの付与について」

講師:林 晃之介(国立国会図書館国際協力課)

当番:東京慈恵会医科大学附属図書館

(1) はじめに

カレント逐次刊行物は現在全世界で約90万種に及ぶと言われ、毎年その10%程にはデータ(誌名、発行所、編者、発行回数など)の変更がある。国会図書館のカレント誌は15,000種であるが、データの変更は毎月150~160件である。このように逐次刊行物は流動が多く、データ維持が困難・繁雑であり、さらにテレビ・ラジオにつぐ情報媒体となっているので、その必要性はとみに強調されてきた。この逐次刊行物識別のための国際的コード番号をISSN(International Standard Serial Number)と言い、その管理機構をISDS(International Serials Data System)という。

日本では国会図書館が国内センターとなり、1976年1月から実際にISSNの番号付与を開始した。差当っては学術雑誌、欧文雑誌を中心に国会図書館の新受入誌、改題誌に番号をつけており、その数は毎月平均50~60種で、今日まで約500種近くのデータをパリの国際センターに送っている。

(2) ISDSの設置

ISDS設置の起源は1967年にまで遡る。この年ユネスコ総会の決議とICSU(国際学術連合会議)の決議とによって、この2機関が共同でUNISIST(世界科学情報システム)構想の実現可能性を調査することになった。この調査計画の中、書誌記述担当のWorking Groupは逐次刊行物情報の正確な把握、記録、伝達機能を持つ

逐次刊行物コード化システムの必要性を認めた。

一方、ISO（国際標準化機構）のTC-46（書誌・ドキュメンテーション委員会）は逐次刊行物の個別識別に使用されるべきISSN草案を作成した。

1972年、ユネスコ総会の決議にもとづいてISDS国際センターがパリに設置されることになり、ユネスコ／フランス政府間の協定によってISDSは1976年1月から正式に発足した。現参加国は約30カ国で、日本は9番目の参加国である。

1. アメリカ 2. イギリス 3. オーストラリア 4. カナダ 5. ソ連 6. 西独 7. フランス 8. アルゼンチン 9. 日本

以上の中、ソ連のみはRegional Centerで、ソ連の外にブルガリア、東欧諸国、モンゴル、キューバまで担当している。ISDSは政府間機構であるので、これへの参加は国として参加することになる。この点、IFLA、FIDへの参加とは相違する。

(3) ISDSの目的と機構

ISDSの目的は逐次刊行物の識別と書誌調整に必要なデータ・システムの確立であり、これによって全世界の逐次刊行物の国際登録を行なうものである。そのためISDSは各国または地域ごとにデータ・バンクを形成しなければならない。このデータ・バンクの情報は参加国の関係者が容易に利用できるようにすることになっている。

この組織の最高機関は総会（General Assembly）であり、その下に理事会（Governing Board）、さらにはIC（国際センター）とNC（国内センター）とがある。なお、ICに附属してTAC（技術諮問委員会）がある。

総会 2年ごとに開催

理事会 定員13名（フランス、ユニシスト、ユネスコから各1名、参加国代表10名）

TAC ICの日常活動を技術的に補佐、委員は主として欧米先進国のNCから個人の資格で出る

(4) IC（国際センター）

ICの職員はセンター長 Rosenbaum 女史以下約15名で維持、運営費はフランス政府・ユネスコが負担しているが、なお十分ではないので各参加国からの助成金に頼ることになっている。

このICの機能責任は次の通りである。

1. NC/RC からのデータ集積による「ISDS国際ファイル」（後述）の維持と確立

2. NC/RC、その他の利用者への情報の提供

3. NC/RC 設立の促進とネットワークの調整

4. ICSU, IFLA, ISOなどの関連国際機関との連絡

上記の「国際ファイル」とは下記の抄録・索引サービス5機関が提供した機械可読データベースを統合したもので、約3万種、その中日本のものは2,000種たらずである。

1. BIOSIS 2. Bulletin Signalétique 3. CAS

4. Geological Abstracts 5. INSPEC

以上の5者を統合したbase fileの外に、1971年以降の新規登録誌約5万種があるが、何れはbase fileに統合され、ISDS Register（登録簿）として印刷・刊行の予定である。

ICは今後の方針として選択的登録を考えている。則ち各NCに対して登録は国際的関心を持たれる逐次刊行物に限り、全く地域的な逐次刊行物は除外するよう求めている。

- (5) NC（国内センター）、RC（地域センター）

NC/RCは担当国/地域内の逐次刊行物に番号を付与するが、当分の間その対象は(a)1971年以降の新タイトルと(b)現在刊行中の逐次刊行物になっている。しかし出版者・利用者から特に要求があればこの枠外のものも受付ける。ICから割当てられる番号は1回に5,000番である。また、NCが未設立の国の番号付与は当面バリのICが代行する。

ISSNは全体で8数字からなり、その中最後の数字はcheck digitであるが、その前の7桁の数字には何の意味もなく単なる識別番号である。

- (6) Key-title の決定

NCは番号付与の時、キー・タイトルを決定する。キー・タイトルとはISDSに特有な概念で、様式的には「本誌名（ISBDで言うtitle proper）＋識別要素」であって、他誌名と完全に識別可能でなければならない。

このキー・タイトル情報は表題紙などからとるが、副誌名、パラレル・タイトル、翻訳タイトルなどはすべて異誌名（variant title）として扱われる、このキー・タイトルを決める時には次のような問題が起ってくる。

1. 同一誌名の場合：年代・出版地を（ ）に入れて識別
2. 一般誌名（generic title）の場合：一般誌名の後にハイフンで国体名を表示する

例：紀要—〇〇短期大学

3. データ・エレメントはローマ字化して送るが、日本語のローマ字化は？ ISO規格が未定
4. ローマ字化すると識別不能になる「化学」と「科学」
5. Nihon か Nippon か
- (7) 既に付与されたISSNの取扱い

Ulrich の14版, New Serial Titles, 1950—1970に収録の逐次刊行物には、それぞれ7万、22万のISSNがついており、この中には日本の分も約8,000種ある。これは各NCの発足以前に付与されたので、重複付与、その外の誤りが発見されている。そのため正式にISSNとして出版者に通知する前に各NCの確認が必要になっている。

(8) ISSNの利点

1. 雑誌の識別が容易になる（印刷することが前提）となっている。
2. 識別コード番号として機械入力された場合、逐次刊行物データへのアクセスが容易になる。
3. 図書館で取扱う時、チェック用のコード番号になる。
4. 流通機構においても連絡業務に現在の雑誌コードと併用できる。
5. 国際登録によって全世界に周知、普及の機会が与えられる。

昭和51年度第4回（昭和52年1月22日）（参加：32名）

「外国雑誌の予約について」

発表：阿字川和雄（東京女子医科大学図書館）

当番：東京女子医科大学図書館

(1) 内容

1. 予約価格
2. 遅滞のない現品納入
3. 信頼ある書店＝図書館関係の確立
- (2) 質疑応答および討論

1. 前金払いか後金払いか

○厳密な意味での後金払いをしている館はない。

○支払時期

早い館：前年の10月20日締め前払い（1館）

遅い館：その年の5月頃（注：国立並）または9月頃

○前金払いの清算

一館だけ清算せず。ただし業者が毎月一回来て

チェックすることを約束してあるので未納の事故はない。

2. 予約価格の決め方

○原則として見積合わせを行なっている。

例：指定業者制度、その年の本館の基準により割引率を決める。

C.P.をあてにせず、すべて原価をおさえる。

○問題点

- a. 変動相場のことを考慮する必要あり
- b. C.P.に疑問がある
- c. agent 側に談合があるのではないか
- d. ドルいくらにするか、C.P.の何%割引きにするかが疑問

3. 欠号・未着について

○支払時期が異なり、また各館の事情もあり、統一して業者交渉することは困難であるが、出来ることなら年一度業者との話合いの場をつくったらどうか。（最低線を決めることぐらいしか出来ないだろうが……また、図書館員が流通機構の知識を持つ必要もあるだろうから……。）

○発行所より各号郵送せず、2～3号をまとめて送ってくる傾向のあることについて——

その誌名を知らせてほしい、調査の必要あり。特殊事情ならともかく、協会において発行所に事情調査する。

昭和51年度第5回（昭和52年5月21日）（参加：46名）

「JOISオンラインのターミナルを設置して——4カ月の利用状況と問題点」

講師：河島裕子（国立がんセンター図書館）

当番：独協医科大学図書館

(1) ターミナルの設備とその費用

1. 機器構成は次の3種——①ディスプレイ型ビデオ（日立）、②プリンター（日立）、③特定回線（電々公社）。機器の1ヵ月使用料は日立関係14万7,000円、電々公社関係3万9,200円、あわせて年間の使用料は223万4,400円。

2. ターミナル設置側の準備——①必要スペース4㎡（2m×2m）、②専用電源板（100V・9A以上）、③コンセントは3ツ又2カ所（3Aと4A）、2ツ又2カ所（1A2本）の合計9A、④特定回線を引くための電話回線2本、⑤取付工事費10万円。

消耗品として①プリント用紙（1箱9,000円、2カ月で消却）、②タイプ用リボン（1本1,200円、6カ月で消却）。その他、JICSTに支払うJOISのライン使用料（200円/分）——これは利用者負担。

(2) JOIS データ・ベース

1. 内訳

①MEDLARS (Index Medicus 1974年1月～1977年4月、データ数81万2,761件)

②CAC (Chemical Abstracts, vol. 80(1)1974年～86(17)1977年、データ数123万7,618件)

③JICST (JICST 1975年4月～1977年6月、データ数79万8,000件)

2. 各データ・ベースの呼出可能時間帯は下記のとおりで、MEDLARS の週間稼働時間は8時間45分。

	午前(9:45—12:00)	午後(13:00—16:15)
月	MEDLARS	CAC
火	JICST	MEDLARS
水	CAC	JICST
木	JICST	MEDLARS
金	CAC	JICST

(3) 申込みから検索文献打出しまで

1. 利用者からの情報要求が発生したとき所定の「JOIS オンライン文献検索申込書」に必要事項を記入してもらう。検索依頼者は直接出向かないで電話などによる申込みも可。さらに外部からの依頼も可。

2. キー・ワードの選択

キー・ワードは、MEDLARSはMeSHおよびCheck-tag. CACは自然語。利用者の要求を明確に把握するため10～15分のインタビューの時間が必要。キー・ワード選択に際して利用者および図書館員の関わり方には次の3通りがある。

①利用者と図書館員がリスト打出しまで共同で処理

②図書館員が選択

③利用者が選択しそれを図書館員がチェック

3. 検索式の決定（概要は後述）

4. 検索

5. 検索式の改訂（必要な場合）

6. 検索文献リスト打出し

検索文献リストの打出し (print out) にはキー・ワードを付ける場合 (full print) と付けない場合 (short print) があり、一論文当りのキー・ワード数は最小6個から最大25個で平均17個。うちIM標目には*印がつく。この数は一論文当たり2.6個から2.9個。ただし full print の場合は short print の約2倍の打出し時間を要し、ライン使用料も高くなる。

7. 検索に必要なツール

①オペレーションのマニュアル：「JOIS利用の手引」,「JOISコマンド解説集」

②件名標目表：Annotated Alphabetic List, Tree Structures, Technical Notes

③辞典類：「医学英和辞典（加藤）」,「医学大辞典（南山堂）」など

(4) 検索式の立て方と留意点

MEDLARS では整合の概念に基づく。

1. キー・ワードの種類および組合せ

Main Headings. Sub-headings. Check-tags の3種 検索に際しては次の組合せ方法がある。

①Main×Main, ②Main×Sub, ③Main×Check-tags, ④上記①②③の応用

2. Sub-headings の使用について

Index Medicus と同じで Main×Sub の組合せ方が可能な場合と不可能な場合がある。間違っていると「タグ ガ アリマセン」の表示。

3. 検索式と再現率・適合率の関係

再現率と適合率は逆比例の関係にある。適合率の高さは次の順である。

①IM標目×IM標目, ②IM標目×NIM標目
③NIM標目×NIM標目

4. Tree 番号に & マークを使う場合

下位概念の用語の下にある文献も一括検索

(5) 検索終了後の処理

1. 完了後、検索結果とアンケートが一緒になった「報告書」を利用者に渡し、必ず記入、提出させる。

2. 検索結果の評価は極めてむずかしい。そのためアンケートの目的は“検索の評価”を得るよりも“利用者の評価”を得ることにある。

3. 利用者の評価がおもわしくないときは、検索文献リスト中で最も適確と思われる文献を示してもらい、それに付いているキー・ワードを再度打込んで検索。

(6) 4カ月の利用状況と問題点

1. 利用状況（資料配布）

2. 問題点

①現在の MEDLARS 稼働時間からすると平均1日の処理件数は7件。④利用者とのインタビューの時間、⑤検索者の事前調査、⑥文献リスト打出の時間、を加えると1件当りの所要時間は25～30分。現在の JOIS 稼働時間では外部からの依頼に応じるのは困難になりつつある。ただし、1977年8月より、毎日どのデータ・ベースでも呼出せるようにプログラムを変えることを JICST と交渉中。

②利用者の料金負担はラインの使用時間によって決まる（200円/分）。ただし、秒単位の端数は分へ切上げ。

③MEDLARS の再現率の問題——基礎部門の研究や薬効に関する研究の文献については MEDLARS では不十分な場合あり。この場合 CAC で補足。

④機器のトラブル——設置当初は特定回線の事故などが週1回の割で起きていた。しかし、3カ月目に機器を取替えた後は回数が減少。

⑤料金と検索文献数の関係——検索の結果がたとえ関連文献ゼロでも利用者には重要な情報を提供したことになる。この問題には特に利用者側の認識が必要。

(7) 若干の補足

1. MEDLARS の検索者の条件

①Index Medicusを使ってレファレンス・サービスをしている図書館員。

②MeSHを使って件名目録を作成している図書館員。

以上どちらかで2～3年の経験があれば良い。

2. オンライン検索とオフラインによるバッチ処理の経済性

検索文献数が非常に多いと予想される場合、オフラインでのバッチ処理が考えられる。これまでの例からみると、オンラインによる short print の場合リスト打出時間1分につき10件で200円、10分では100件で2,000円。しかし100件以上だと検索文献を絞るのが困難なので是非ともキーワードが必要である。そこで100件を目安にし、それ以上はオフラインにした方が望ましい。

ただし、オフラインだと full print になり料金計算も異なる。登録料として500円、プラス検索文献1件につき15円申受けている。なお、CACの場合リストを打出すと、copyright として1件につき、さらに10円加算される。

3. 利用者の評価

非常に良い。理由は①短時間で検索可能、②機器との会話で検索可能、③打出されたリストはそのまま自分の文献ファイルとして使用可能で書写も不要、など。

4. JOISターミナル設置のPRについて

所内—①内報による通知

②デモンストレーション（2日間）

外部（文書で通知）

①日本医学図書館協会関東地区加盟館

②近畿病院図書室協議会加盟館

③「国内胃がん文献速報」配布対象者

5. JOIS検索結果について他の二次資料による補足的サービス実施の有無——無し。

昭和51年度第6回（昭和52年11月19日）（参加：42名）

「医学雑誌総合目録の今後の問題点」

講師：板橋端夫（昭和大学図書館）

当番：東京医科大学図書館

「医学雑誌総合目録欧文編」第6版（日本医学図書館協会）の完成、発行を契機に「第6版」の問題点を板橋氏が編集上の豊富な実例をあげて指摘した。また協会出版物としての総合目録のあり方について出席者から意見の発表があった。

(1) 「第6版」の編集上問題となったのは次の事項である。

○本体とページの連続している supplement の表示

○subtitle のある雑誌

○誌名の変遷

○多年度にわたる巻の出版年の表示

○議事録の回次

○途中から号表示のついた雑誌

○出版社が頻繁に変更になった雑誌

○他の雑誌の付録扱いになる号のある雑誌

○誌名が頻繁に変更になる雑誌

○複数の誌名をもつ雑誌

○単行書として他に収録されているもの

○巻表示、号表示の特殊なもの

○発行頻度の極端に長いもの

上記のような問題を考えると総合目録編集の目的をどこへ置かつまひ貸出係用、相互貸借係用、受入係用、目録係用などそれぞれの使う立場によって総合目録の使い方が異なる。これらをすべて同時に満足させるような総合目録であればそれは詳しくあっても使いにくいものになるだろう。

どういう総合目録をつくるかはすなわちどういう使われ方があるかと密接に関係があるだろう。

(2) 日本医学図書館協会と総合目録

○従来総合目録各版は編集の都度編集委員会を組織し解散してきたが出版委員会の常設、審議継続をはかることになった。

各加盟館は新しく雑誌を受け入れる時、創刊号を受け入れる時はそのタイトルページを出版委員会へ添付報告してほしい。委員会では標目決定その他の標準化を行いニュースとして加盟館へ連絡するようにしたい。

○協会の総合目録を New York の Union Catalog of Medical Periodicals (The Medical Library Center of New York) のように編集当時の現行雑誌に収録対象をしぼりたい。

○「学術雑誌総合目録 自然科学欧文編」（文部省学術国際局監修）の補遺版と協会版の補遺版は今後どのような関係になるのか——

今後の協会版の総合目録では注記事項のみを別にしてマニュアルとし、本体は所蔵事項のみ記入するという方法も考えられる。

○所蔵事項報告館からの良い原稿が良い総合目録をつくる。ということを銘記してほしい。

○雑誌というものについての認識を特に加盟館チーフに問いたいと思う。

○できあがった総合目録は海外においても利用されている。良い目録をつくりたい。

○編集に実際にたずさわっていない地区加盟館にもいろいろな協力（良い原稿提出など）を要望する。

○二次資料に収録されているタイトルであっても即雑誌ではない。

今後の日本医学図書館協会に次のことを希望する

○出版委員会を頻繁にひらく

○標準化をつとめる

○ニュースを流す

昭和52年度第1回（昭和52年12月3日）（参加：51名）

「新NCRと記述ユニット・カード方式」

講師：丸山昭二郎（国立国会図書館）

当番：東京医科大学図書館

日本図書館協会目録委員会が数年来準備してきた新NCRは、今年12月、日本図書館協会より、出版が予定されている。

国立国会図書館では、昭和53年1月からこの新NCRを採用する計画で準備している。そこで目録委員でもある丸山氏に新NCRの成立経過と従来のNCRとの相違点を挙げてもらった。

(1) 経過

NCR 65年版は著者基本記入制を採用しており1961年のパリ目録原則会議の決定に従って作成されたものである。しかし、以前からこの著者基本記入制には疑問、批判的な動きがあった。

一方海外でも、国際目録専門家会議の提案によって、IFLA目録委員会がISBDを発表し、標準化を行なった。

このISBDに従い英米目録規則、第6章が1974年に改訂されている。

最近の世界的な傾向として、電算機の導入、印刷カードの普及、書誌記述の世界的な標準化の動きが活発でこれが目録規則に影響を及ぼしてきている。そこで規則作成のさい、目録委員会は国際的な標準にあわせることを念頭に、1969～70年にかけて、記述ユニットカード方式に方向転換した。この新NCRは国際的標準に合わせ、かつ日本の独自性（漢字カナ使用）を持ち、従来の規則にも矛盾せず、将来的に基本的な原則は変わることはないだろう。

(2) 主な変更（例示省略）

1. 記載の位置

2. 記述

○著者表示 2人までとし、3人以上略す

○出版年は西暦のみ

○図版 本文の頁付に含まれない図版のみ

○地図、肖像を廃止

○団体名の場合の副標目をやめる

○1965年版の日本・法令、無著者名古典を廃止

3. 明治以後刊行された和書に限定

昭和52年度第2回（昭和53年2月22日）（参加：60名）

「図書館における複製に関する著作権」

講師：黒沢節男（文化庁著作権課）

当番：東京慈恵会医科大学附属図書館

著作権とは、日本の著作権法の第1条（目的）にうたわれているように、この権利を定めることによって、著作物等の著者の権利を保護し、文化の発展に寄与することを目的としている。しかしながら、公正の利用という範囲で、調査研究、保存、あるいは絶版等で入手が困難である場合に、政令（著作権法施行令第1章著作物等の複製が認められる施設）で定められる施設では複製が認められる（→著作権法第31条）。

なお、著作権の権能の範囲は、通常の場合、日本は著者の死後50年、西独70年、アメリカ（新法）50年となっており、その後は法的には何ら拘束されることなく複製できるわけであり、また万国著作権条約（日本も加盟）は、加盟国間相互でそれぞれの国の著作権を保護するものであり、加盟国にあっては、他の加盟国の著作物を自国の著作権法により複製可能であり、また非加盟国（例えば中国、韓国、北朝鮮）の出版物については自由に利用して良い。

第31条の解釈について

“…を目的とする図書館その他の施設で政令で定めるもの”とは、既に述べた施行令第1章によるものであり、この資格を有さない施設が、万国条約を締結している加盟国の著者からクレームをつけられた場合には問題となる。

また、複写機がその図書館の司書に相当する職員の管理下におかれている必要があり、例えばコイン式の複写機や複写業務を業者に依頼している場合は違法行為と解釈する。1項の“公表された著作物の一部分”とは、一般的に一冊の単行書の半分以上と考えて良いが、例えば一冊を10人で著わしている場合は、各人担当分の半分以上のみ複写可能と解釈すべきである。

“（発行後相当期間…）”とは、通常の流通経路では入手できなくなったと判断する場合であり、例えば前月号の月刊誌とか前週の週刊誌とか、既に街頭では手に入らないものと解釈する。

ただし、一冊の単行書、定期刊行物等の内容を企画、立案した編集者または団体がある場合には、編集著作権が介在し、その権能も考慮する必要がある（→第12条）。

質疑応答

Q：アメリカ国立医学図書館から日本医学図書館協会へ、今年よりアメリカの新著作権法が発効となるに伴い、その第107条と第108条について、日本が医学図書館25巻1—2号（'78）

ら依頼する場合に、それら条項をチェックすることを義務づける指示がきているが、そのうち第108条9項2の“…購入に代わるほどの量…”とは具体的にどのような意味か。

A：本日、アメリカの新著作権法については準備不足でもあるが、現在の時点としては文化庁としても具体的指針を出すことはできない。

Q：雑誌のバックナンバーについては、それを扱う業者が非常に高価な値段をつけているし、また近年複写機能が良くなってきたので、バックナンバーを補充する場合も日本の第31条によってかまわないか。

A：良い。

Q：編集著作権とは具体的にどういうことか。

A：第12条に規定されていることで、個々の著作者のほかに全体的に特集等を企画した編集者に与えられた権利を言う。従って著作権の機能内で複製する場合は、著者およびこの編集者にも承認を得ねばならない。ただし、著者の著作権が効を失った場合には、編集著作権もなくなる。

Q：図書館が収蔵資料を貸出した後、借出者がコイン式あるいは業者に依頼して複製するのはどうか。

A：政令の定める図書館の管理外であれば違法といえる。たとえ、複製利用者本人がコピー業者のゼロックスのボタンをおしても同じことである。

Q：雑誌の一号が一人の著者で全部占められている場合、全部の複製は可能か。

A：たとえそれが定期刊行物であっても、この場合は単行書に準ずるものと解釈すべきである。

Q：著作権の保有期間である雑誌の一論文が100～200ページ以上にも及ぶ場合は複製が可能か。

A：他の論文もその号に同じように扱われているなら可能である。

Q：先程のバックナンバーの補充についてだが、“一般に入手することが困難”という制限は高価であっても市場にあるわけだから第31条3項に該当しないのではないか。

A：刊行当時の価格に比して非常に高価であるわけだからこの項の適用範囲内と解釈する。ただし、所蔵する図書館から借出して自館の方で複製する方が安いからというのは良くない。

Q：一般的に入手し難い貴重な資料は複製し、製本して保管して良いか。

A：良いと考える。例えばもしかしたら神田の古本屋に

一冊あるかもしれないがそれは絶版に準ずるものと解釈する。

Q：外国誌に投稿した論文の別刷によって複製する場合、編集著作権が介在するか。

A：一論文であれば侵害にはならない。

Q：編集著作権者と著作者とはどちらが優先するか。

A：第12条でもどちらが優先するとは言っていない。一論文であれば著者のみの許諾で良く、例えば5編のうち4編、3編であれば編集者にも必要である。

なお、編集者に著作権があると契約されている場合は、著者に了解を得る必要はない。

Q：著作権法についての訴訟法はあるか。

A：民事、刑事の中で行なう。

当日配布資料

1. 図書館等の施設で複製する場合の関連条文抜刷
2. 「アメリカ合衆国著作権法」出版案内

昭和52年度第3回（昭和53年3月4日）（参加：41名）

「相互貸借における謝絶について」

発表：I L L 懇話会・久保田福治（独協医大）

当番：慶応大学医学情報センター

先づ I. L. L. 懇話会についての紹介が行われ、続いて本日の課題である謝絶統計についての中間報告が次のように行われた。

謝絶統計を行うまでの経緯の説明とその理由及び目的が述べられ、その集計の結果として集計表（当日の配布資料）によってその内容と問題点が指摘され、更に謝絶の項目毎に受付件数あるいはその他の諸条件との関係についてスライドを用いて解説がなされた。

次いで、それぞれの項目毎に謝絶を減らしていくための改善点等の提示がされた。

しかしこれらのことについては、もっと細部にわたる検討を加えてみる必要があるので、最終的発表はペーパーにして行なう旨が述べられた。

昭和52年度第4回（昭和53年4月22日）（参加：45名）

「利用者からみた件名目録について」

講師：中村初雄（慶応大学名誉教授）

当番：東京女子医科大学図書館

はじめに利用者の中には、図書館員自身も含まれると考えるべきである。

書誌的記録の意義として、同定（Identification）と識別（Distinguishing）があるが、その目的には財産目録、

書誌的道具、検索用の鍵がある。このうち、検索用の鍵として KIS（Know Item Search）と、SS（Subject Search）の2種が考えられる。更に SS には分類（体系化）によるものと、Natural language によるものがある。

今日はこの Natural language がテーマとなる。

「ことば」は主題を把握するのに適しているが、しかし、この「ことば」は決して最有力な武器となるものではない。例として、LCの件名標目標をあげると、下記のような

Libraries, Naval but Military libraries

Libraries, Catholic but Jewish libraries

矛盾（問題）がある。

だが、主題分析（把握）の基となるのは「ことば」である。ある情報の送り手と受け手の夫々の、その情報を表現する「ことば＝信号」に対する予備知識（土俵）が一致することにより、はじめて、その情報が伝達可能となるのであるが、それを一致させるのはなかなか困難なことである。そこでその差（送り手と受け手）を少なくする努力が必要となる。例えば、その「ことば」として、MeSH を使用したとしても、利用者もその MeSH を認識した上で件名カードとして検索しているという確信があれば、「MeSH」をそのまま利用してもさしつかえない。利用者として使用できないような場合には、十分な参照等をつけたり、あるいは無駄な重複はさけるように配慮すべきである。

MeSH 使用例として Philadelphia Library, Albany Medical College Library をあげる。

（質問）

1. Philadelphia Lib の例について再度具体的に、
2. (Albany Med. College) の Three way について再度
3. 件名カードを作成する際の注意、問題、手順等について

無駄な重複はさける。（例えば、一つの方法（分類）から十分に検索可能であれば件名は不要等）。全体（組織）としての奉仕であることを忘れてはならない。

Three way は Subject section/Proper Name Section /Title section である。その前に年代（1950年以前と以後に水平分割）により区分している。水平分割するか否か、等は夫々の長短を考慮し、その Library に合ったものを採用する。

既 報 告 分

- 1) 高野史子：合同インサービス・トレーニング
医学図書館，22：299—305，1973

- 2) 阿字川和雄：「合同研究会」のその後——1975年度
展望。
医学図書館，22：122—129，1975

◇ 相互貸借マニュアル

相互貸借業務必須のマニュアル。

日本医学図書館協会における申込の手続き（国内，国外），書誌事項の
確認，テレックスによる相互利用等を具体的に説明。

サンプル 20枚

付録：各種資料案内

ルーズ・リーフ

1976発行 1977改正 1978再版

¥ 2,500

申込，問合せ先

113 東京都文京区弥生2—4—16

学会センタービル内

日本医学図書館協会

TEL：03—815—1942 振替：東京6—49585

取引銀行：三井銀行上野広小路支店 普通預金（口座番号）158—376